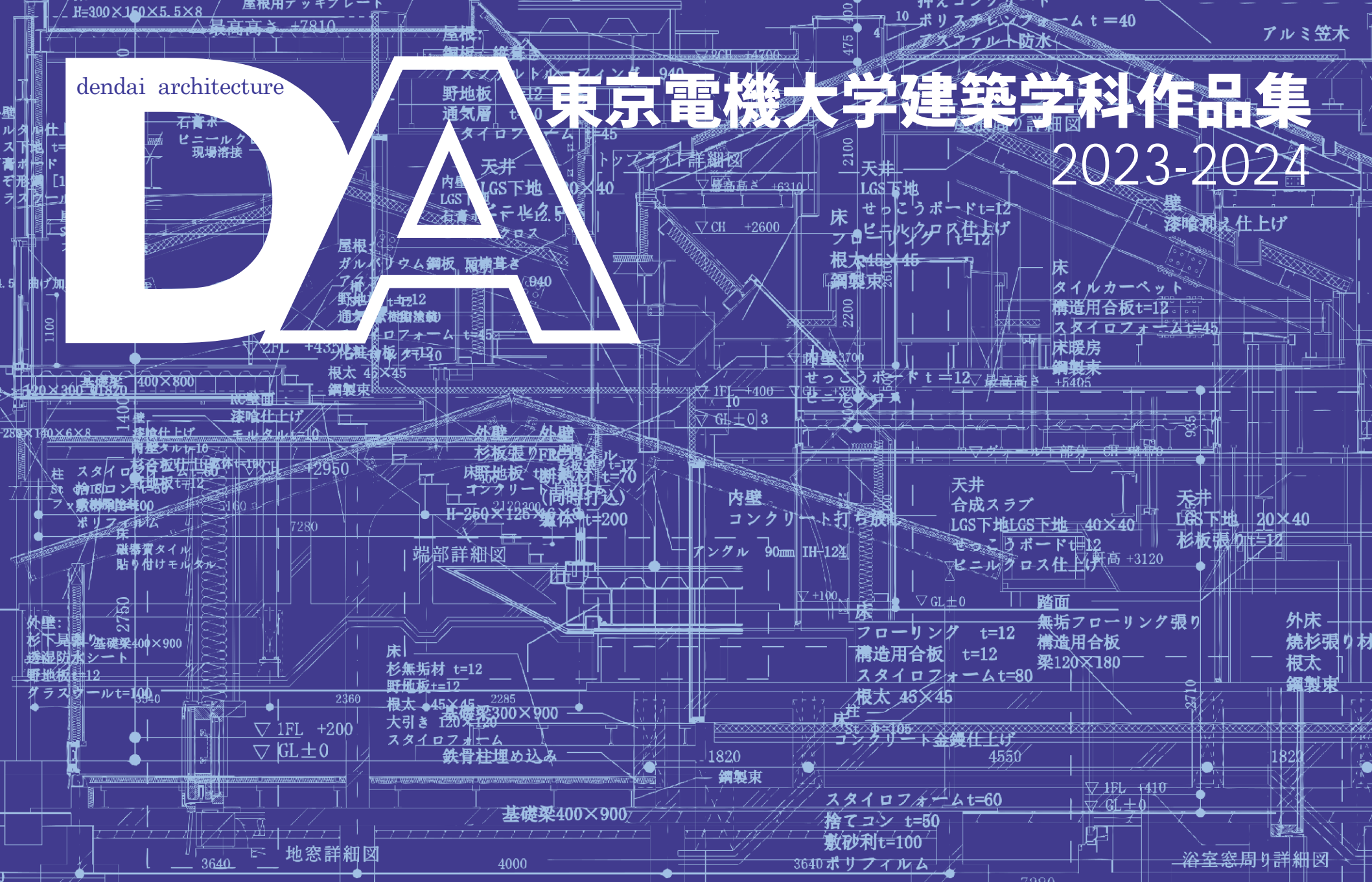


dendai architecture

東京電機大学建築学科作品集

2023-2024



Contents

<i>Diploma</i>	卒業設計	● 空間デザイン系卒業設計 4
<i>Core Design Studio I</i>	建築設計製図Ⅰ	● 絵画・彫刻の展示空間 13
<i>Workshop</i>	ワークショップ	14
<i>Core Design Studio II</i>	建築設計製図Ⅱ	● 住まいの設計 16
<i>Core Design Studio III</i>	建築設計製図Ⅲ	● 公共に開かれた建築の設計 18
<i>Core Design Studio IV</i>	建築設計製図Ⅳ	● 集合住宅の設計・改修 20
<i>Core Design Studio V</i>	建築設計製図Ⅴ	● 未来の小学校の設計 22
<i>Urban Design</i>	建築・都市設計	● 建築からまちづくりへの展開 26
<i>Competition</i>	コンペティション受賞作品	29
<i>Master's Design Project</i>	修士設計	30

巻頭言

横手義洋 東京電機大学未来科学部建築学科 学科長

このDA作品集は、2023年度(2023年4月から2024年3月)に東京電機大学未来科学部建築学科カリキュラムの基幹科目である建築設計製図Ⅰ～Ⅴと3年後期の建築・都市設計、住環境・インテリア設計、建築構造設計、建築設備設計に特別設計Ⅰ・Ⅱ(卒業設計)と大学院の設計科目と修士設計(修士論文相当)の優秀作品をあわせて収録しています。建築学科4年間と大学院建築学専攻2年間をあわせた6年間の設計教育内容、および、成果をご覧いただければ幸いです。

これら一連の設計科目は、建築学科のカリキュラムにおいて大変特別な意味合いを有しています。なぜなら、学生は建築学の講義・演習科目で習得した知識を、設計課題の中で総合的化し、ひとつの作品のなかに応用することを求められているからです。そのため、教育体制としても、あらゆる専門分野の常勤教員が何らかの形で設計指導に参加する仕組みとなっています。また、実社会で建築家としてご活躍されている先生方にも、おかげさまで毎年多数、設計指導に参加していただいています。こうした非常に手厚い指導体制が、建築学科の教育をハイレベルなものとしてくれますし、年次を経るに伴い建築設計のおもしろさ、ひいては建築学の深遠さに導かれるような教育プログラムになっていると自負しております。学生たちが各課題に懸命に取り組み、それぞれに成果を上げていることは言うまでもありません。

未来科学部建築学科では、高度に多様化する各専門分野の先進性を受け入れつつ、一方で個別分野がそれぞれの強みを生かし隣接分野を巻き込みながら未来へと発展していく総合科学として建築学を捉えております。そうした認識の下、建築学科が将来を担う学生たちにとって刺激に満ちた学びの場であり、さまざまな専門分野の教員および学生たちにとって生産的な交流の場であり、広く社会に貢献できる研究・教育の場であるよう、教員・スタッフ一同、努力を重ねております。現代社会をめぐる問題はますます複雑化の一途をたどっているように見えますが、そうした状況も学生たちとともに未来を見据える建築学科にとっては好都合です。さまざまな可能性を探り、さまざまな課題に恐れずに挑戦することのできる建築学科であり続けたいと思っております。

最後になりましたが、建築学科の設計教育にご尽力いただきました多くの非常勤講師の先生方に深くお礼を申し上げます。今後とも、ご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

2024年7月吉日

講評 ● 日野雅司

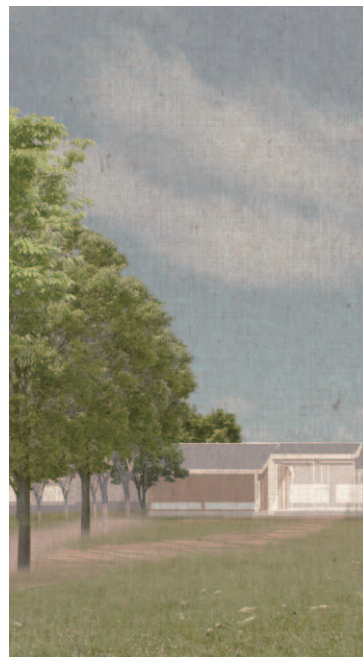
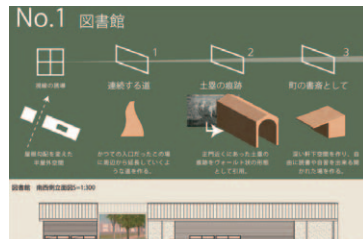
建築学科で学生達は幅広い専門知識を学び、建築デザインが扱うべきテーマや社会の中での位置づけ知る。建築が社会に対して何を成すべきか、何を問うべきなのか、大学4年生の社会への視座を測る上で、卒業設計は大切なマイルストーンである。そのため卒業設計は表現の巧みさやプランニングの精度にとどまらず、ひとり一人の社会に対する「感度」が試され、またテーマの幅広さが建築学科の教育の成果といえることができる。

選抜作はどれも、建築のデザインによって未来を創っていくという気概を感じるものである。「Insel / Housing No.1-5」と「町の畳み方」は共に、変わりゆく地域の中で建築の姿をデザインするものである。時間軸の中で建築の役割が変化していく、長く地域の記憶を残すためのデザインといえる。負の歴史や来たるべき衰退もポジティブに捉えて希望を見いだす、新しい建築が扱うべきテーマと考えられる。「RE:structure ave.」と「Tokyo Residue」は、都市の交通インフラを再解釈して人の場へと変化させるアイデアである。東京の公共空間の再編を予感させる意欲作であり、都市空間を生活者が取り戻すという意気込みを感じる案である。「広告史の特異点」は情報化に翻弄されるメディアや文化の新しい形を建築の空間として表現する。情報が最後は建築や実在する場に帰って来る、という前向きな覚悟を感じる。「本懐」と「ファストファッション中継所」も文化を扱う提案であるが、活動形態の変化や環境への取り組みなど、今日的なテーマで建築の形式を再定義しようとしている。「大きな屋根の下」と「大切に小さなことを」はどちらも福祉施設の提案であり、従来の枠に捕らわれない新しい空間的な提案を行っている。今一度、建築空間の持つ可能性を模索するような、デザインすることに対する信頼が表れている。一方、障がい者の学びを扱った「つながる・まじわる 一人ひとりの学び舎」は計画上の高い精度のプランニングが強い説得力を持っている。その上で、新たな場のデザインに迫り着こうという、大学教育の一つの成果を感じる提案である。

Insel / Housing No.1-5

かつて差別されながらも生きた患者たちが植えた緑を、周囲と距離を置くためのものではなく人がつながらず生活の場へと転換する提案。アノニマスな象徴性を持つ5つの建築が生活と記憶の器となる。場所性を読み取った美的判断を含むディテールが建築に時間的強度をもたらす。この作品の目的は過去の記述であり、共同体の構築であり、自身の凡庸な設計観の提示である。

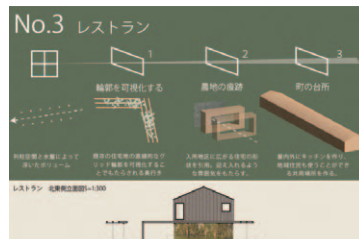
- 卒業設計賞
- DA展 湯浅良介賞
- 卒、2024 53選
- せんだいデザインリーグ 100選
- JIA 東京都学生設計コンクール出展



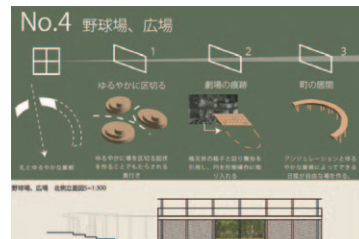
計画地 No.1
図書館 / 町の書斎



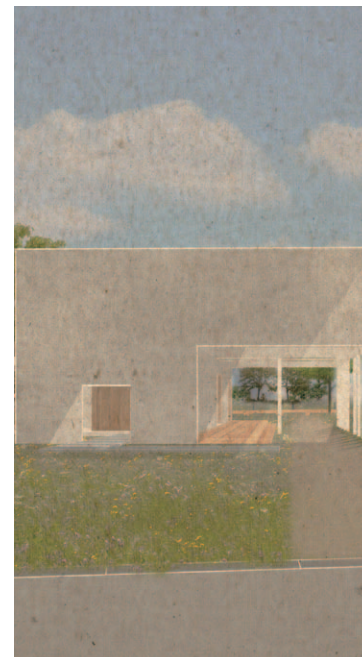
計画地 No.2
児童館 / 町の子ども部屋



計画地 No.3
レストラン / 町の台所



計画地 No.4
野球場、広場 / 町のリビング



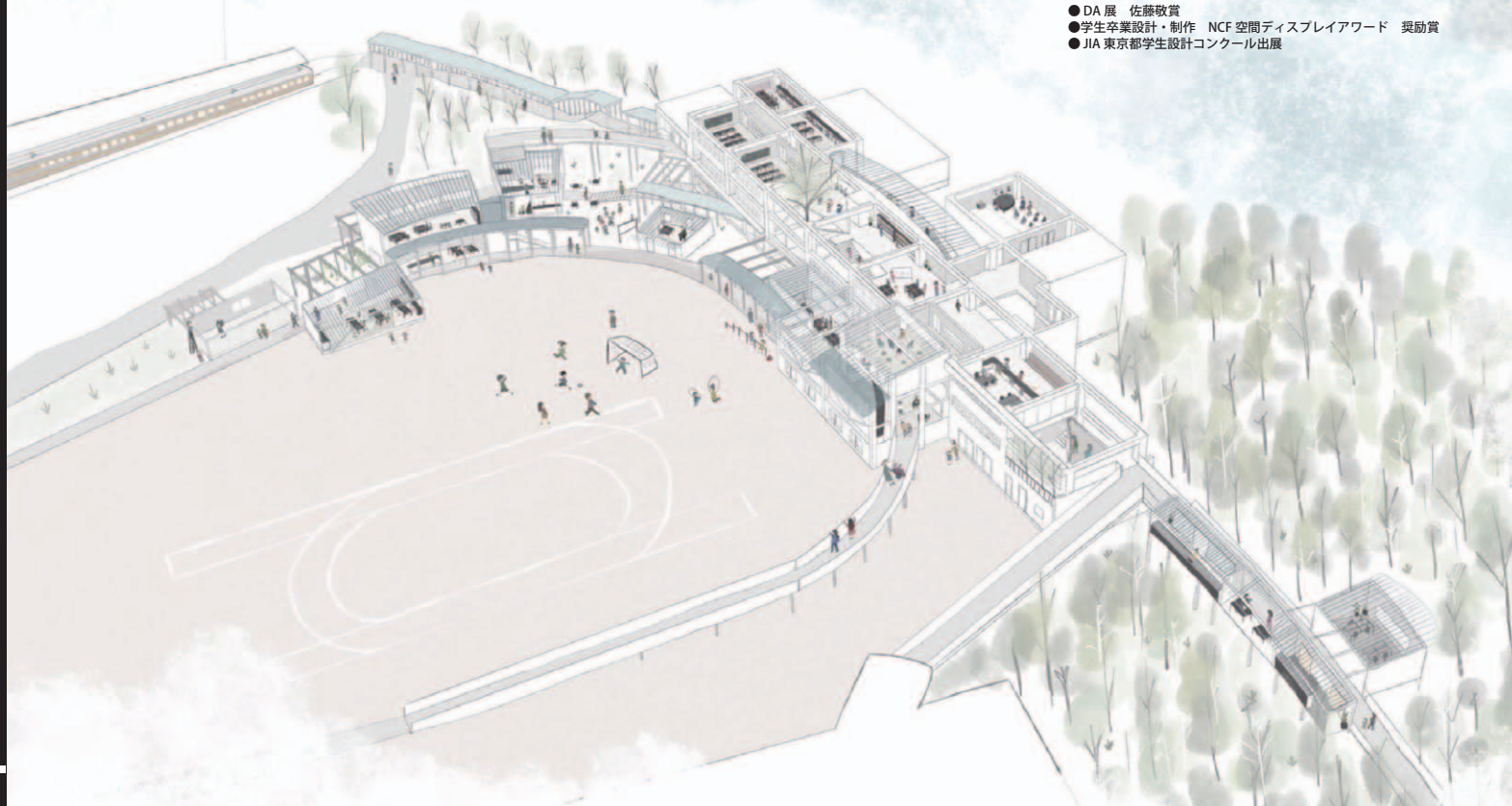
計画地 No.5
銭湯 / 町の浴室

町の畳み方

人口減少に伴った公共建築の残り

人口減少が地方で喫緊の課題となっている中、公共建築は繰り返し建て替えるべきか。時代の流れを受け入れ町を小さく残し続ける為、町を畳むように公共建築をしまっていく。

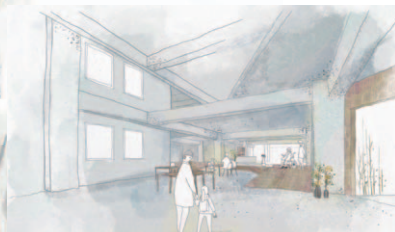
- DA 展 佐藤敬賞
- 学生卒業設計・制作 NCF 空間ディスプレイアワード 奨励賞
- JIA 東京都学生設計コンクール出展



2階 福祉・教育課



2階 増築吹抜け空間



1階 食堂部分



1階 待合×図書





広告史の特異点

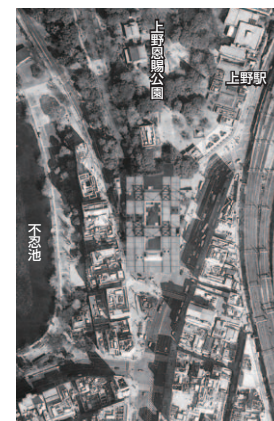
資本の広告から文化の広告への
過渡期的可動建築

ある日、芸術の都市：上野に大屋根の建築が現れた。新しい広告「体験型屋外広告」と、それに伴う人々の新しい活動「広告文化」によって従来の広告史を一変させる特異点となる建築を作り出し、新たな広告の歴史を紡いでいく。やがて資本たる広告は成熟され文化に帰化していき、建築はより人々のための空間へと変化していく。これは資本から文化へ変遷していく過渡期的可動建築である。

- レモン画翠 学生建築設計優秀作品展
- せんだいデザインリーグ 100選



体験型屋外広告を行う Ad Box。スロープから活動を見ることができる。ニースに合わせて昇降する。



広告壁が解体され人々の文化の居場所になる。
建設会社×農園芸用品製造企業×消費者



大屋根に収納された Ad Box は諸室空間として、文化空間として、
広告史の記録として機能する。

RE:structure ave.

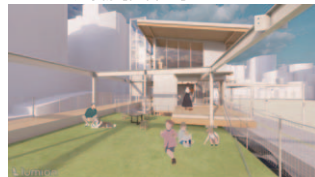
道路空間の再検討と、地域が作り変える設計計画の提案



ギャラリー【在来平屋】



ギャラリー／事務【在来住宅】



セミナーハウス【木造大規模】



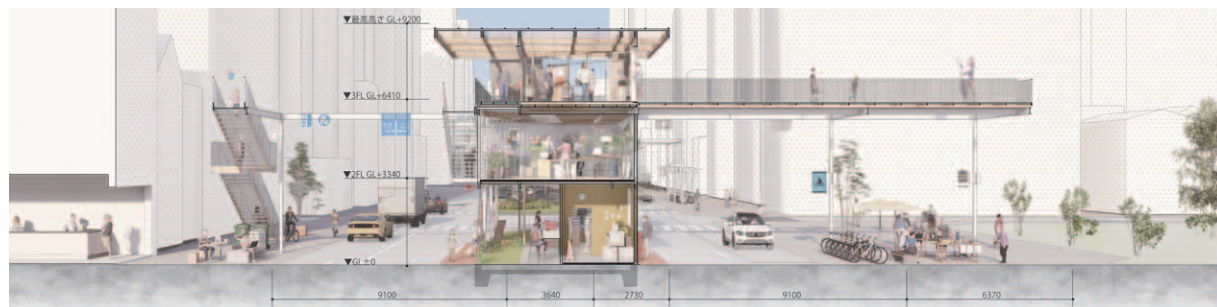
待合



テナント【木造中規模】



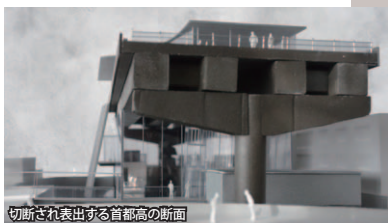
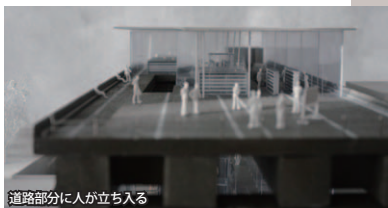
スタートアップオフィス【在来住宅（長屋）】



モビリティの発展する未来、道路空間と建築・街の在り方は変化すると同時に、よりヒューマンスケールに環境を進歩させることは、縮小社会において重要な視点である。このような中で、一部の道路を新たに街区として定義し、「モビリティの発着シーン」と「生活インフラとなる場所」を地域住民参加型にて設計を行う。これにより、新規要素を柔軟に受け入れつつ地域コミュニティを長期に渡り維持し続けられる設計計画を提案する。

●近代建築社「別冊卒業制作」掲載
●DA展 秋吉浩気賞

SITE 2 Tokiwabashi



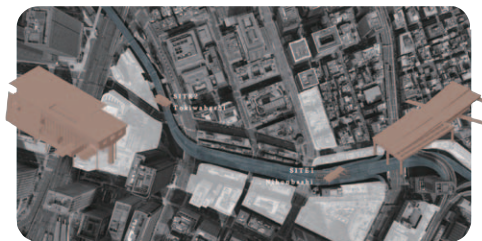
Tokiwabashi メディアセンター

Tokyo Residue

首都高の断片的保存による
風景と水辺の継承

日々変化が絶え間なく続く東京の街並み。近年の街の変化の仕方には、その場の特性を欠くような移ろいに見えていた。そのような中で東京「日本橋」では首都高の地下化による高架の撤去、それに加えて川沿いの再開発により日本橋の風景は劇的に変化しようとしている。風景と場を紡ぐため、消えゆく首都高を過去を紡ぐ装置と解釈して断片的保存を行い、水上の交通・文化施設へと変換する。

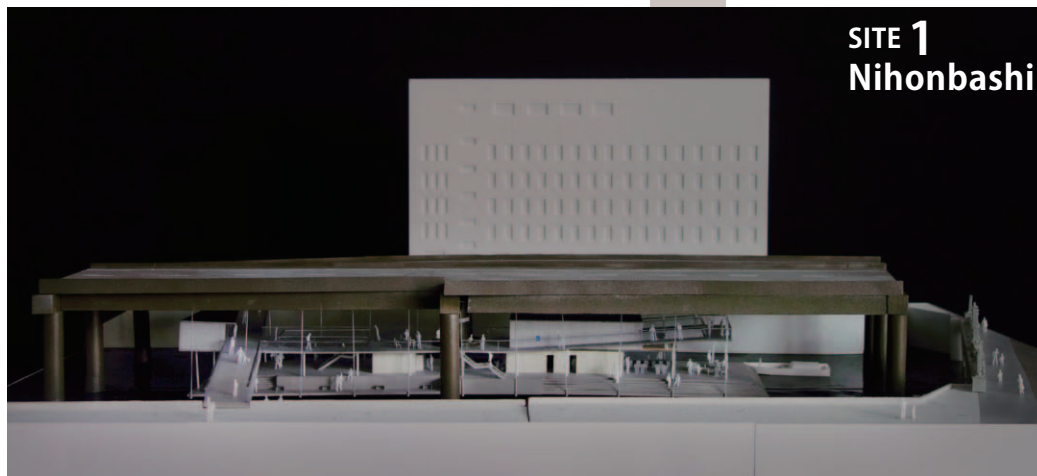
- 全国合同卒業設計展「卒、24」：50 選
- 千葉県建築四会学生賞賞：優秀賞
- 学生卒業設計・制作 NCF 空間ディスプレイアワード 優秀賞

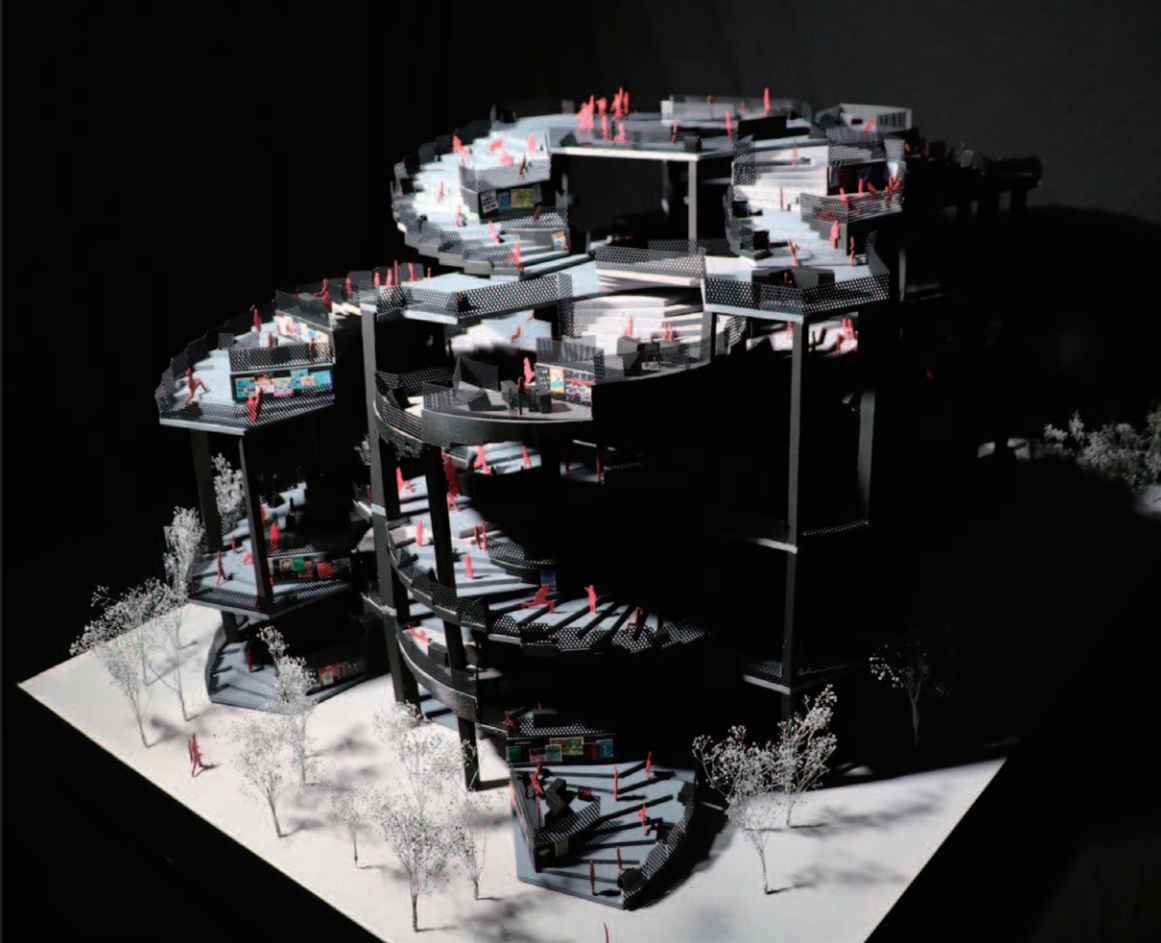


Nihonbashi 船のターミナル



SITE 1 Nihonbashi

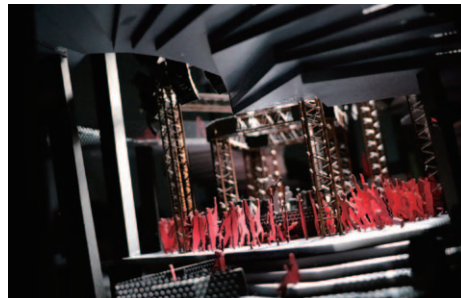
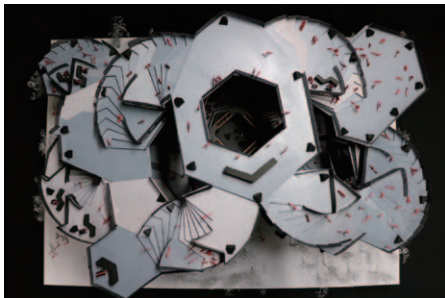
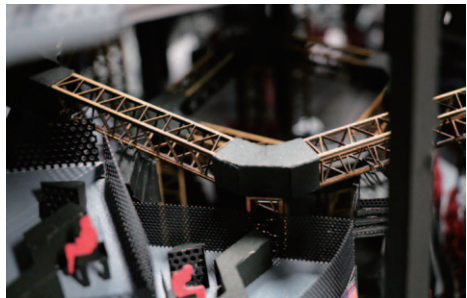
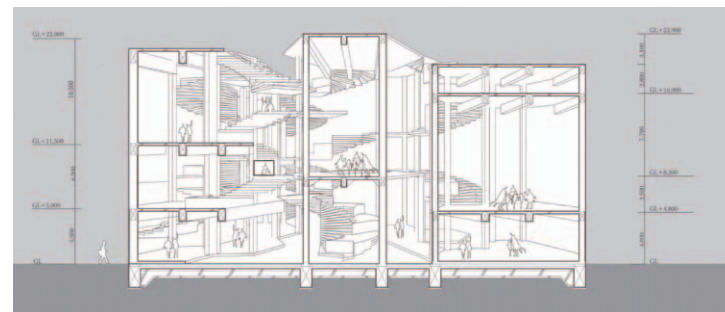




本懷 リズムが積層する新たなフェス形態の提案

音楽に一日中浸ることが可能なのは音楽フェスである。しかし、音楽フェスは仮設的な期間限定イベントで、フェスの歴史やアーティストの変遷を感じることができる場所がライブハウス以外にない。そこで、私は「フェスの建築化」をテーマに設計を行う。平面的なものが積層したとき、どんな空間が生まれるのか、新たな音楽カルチャーを紡ぐ一つのきっかけとなることを願う。

●千葉県建築四会学生賞 出展





大切に小さなことを

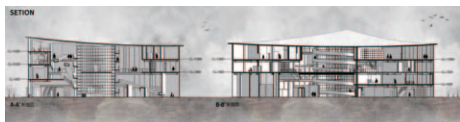
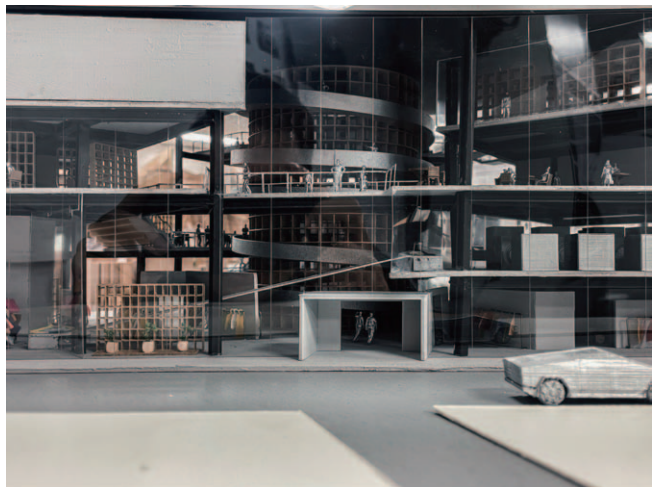
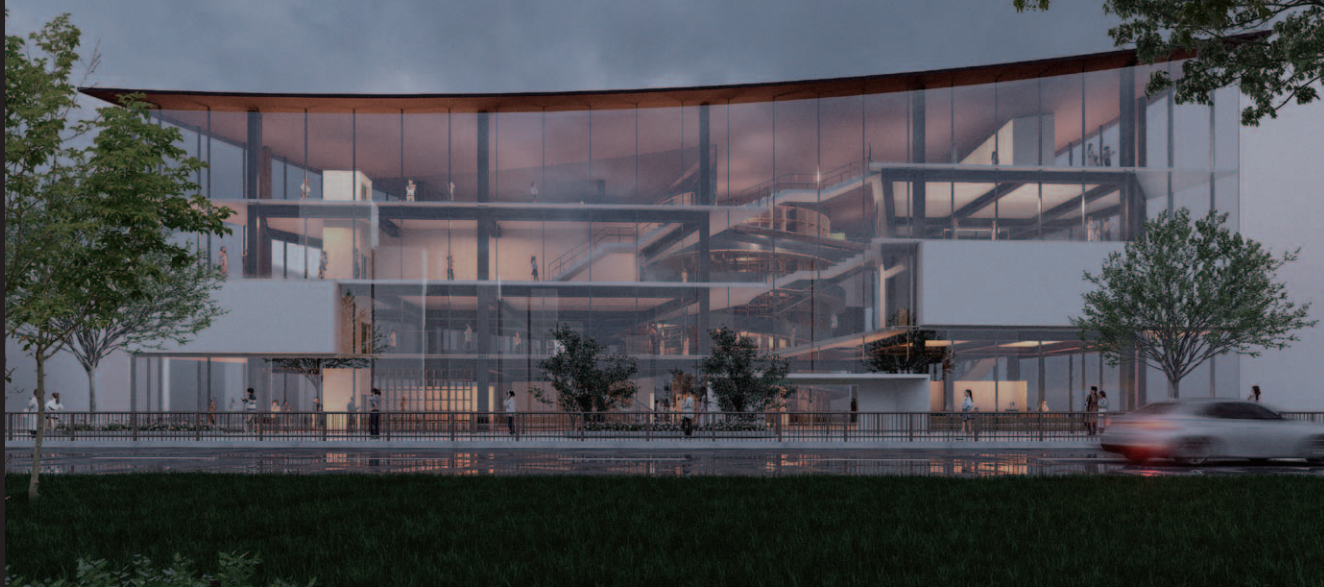
子育て支援はもっとまちに馴染ませることが大切である。
 両親の子育てに対する悩み、こどもが感じる学校での悩みはいつも
 日常にたくさん落ちていて、それが散ってしまう前に私たちは手を差し
 伸べなければならない。
 とても大切に小さなことをこの施設が受け止める。

● 埼玉県卒業設計コンクール 出展



ファストファッション中継所

Transfer station of McFashion



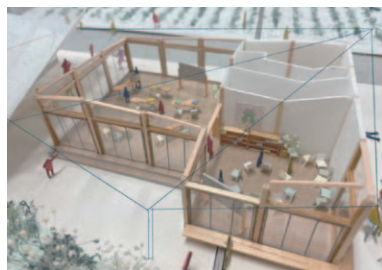
PLOT PLAN

- 01. メインエントランス
- 02. 販売スペース
- 03. カフェ
- 04. レジ
- 05. 受付カウンター
- 06. お手洗い
- 07. 搬入用倉庫
- 08. 搬出用倉庫
- 09. 搬入 搬出口
- 10. ロールベルトコンベア

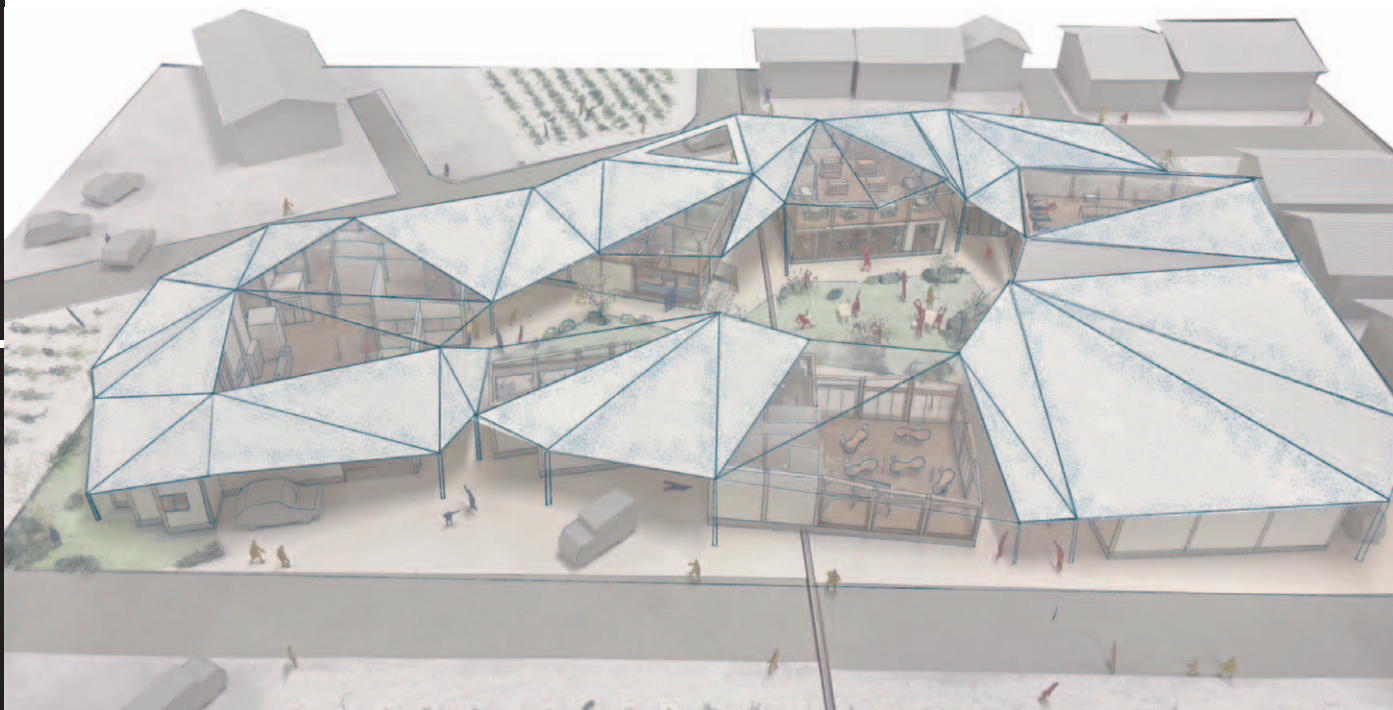


現在、環境問題は深刻化しており、環境保護はもはや選択の一つではない。衣類は外部環境から隔てる最小単位として、ファストファッションのビジネスモデルに引き起こされる環境汚染に私たちの注意を引くべきだ。

回収した材料を使用したオリジナルの衣料品を購入、自分で設計や制作を行う。個性的な商品を使って、一般的な流行に立ち向かう。消費者の意識変化がファストファッション産業の消滅につながるかもしれない。

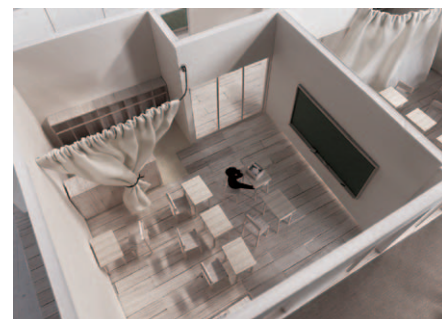
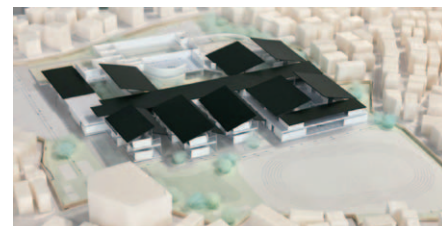


大きな屋根の下 地域の新たな拠点を目指して



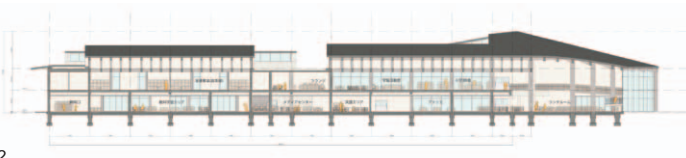
「介護」それは誰しもが避けては通れない。だが介護の現場は逼迫し、ケアの場所は施設から自宅へと変える事が重要な今、介護の場所として必要な形はなんだろうか。また、介護をする・される、施設に入る・入れる事への抵抗感はどうしたら軽減できるのか。本設計ではこの2つの問題に関し、介護の中でも「介護予防」を通して、予防となりうる機能を取り入れ町に開くことで地域拠点にもなりうる介護予防施設を提案である。

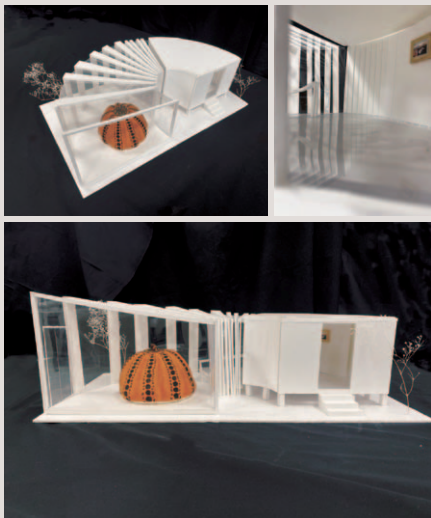
●埼玉県卒業設計コンクール 出展



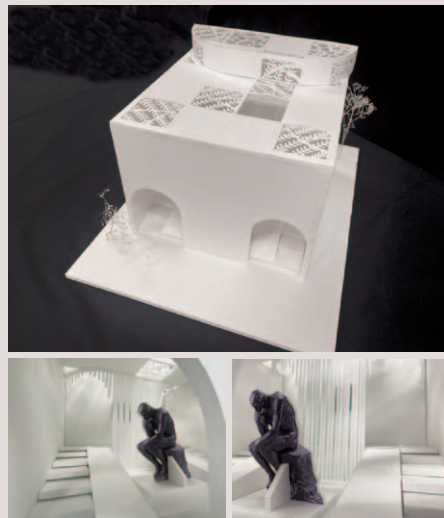
障がいについて社会的に理解が進んできた現代において、特別支援学校に在籍する児童生徒は増加傾向にある。その中で現状の学校制度では、障がいの重さは人それぞれであるのに、小学校と特別支援学校とを「障がいの有無」という判断基準で二分割している。今回の設計ではこの2つの施設を合築し、建築的なつながりだけでなくカリキュラムにも交わりを持たせることで、一人ひとりに合わせた学校生活学校をおくれる校舎を提案する。

●日本建築学会「全国・高専卒業設計展示会」出展

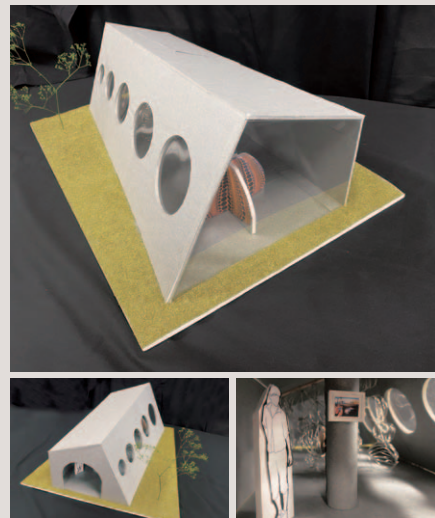




明暗

WESTERN-STYLE GARDEN ×
EXHIBITION SPACE

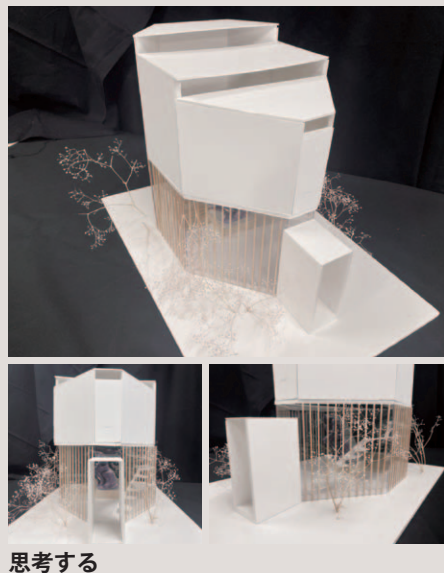
断崖絶壁の美術館



生命力



Multiview



思考する

絵画・彫刻の展示空間

講評 ● 横手義洋

100m³の空間を「絵画と彫刻の展示空間」として設計する課題である。全体ボリュームに制限がある中で、絵画と彫刻にふさわしい個々の展示空間をいかに創造し、また両者をいかに魅力的に関連付けられるか、というやや難易度の高い課題であった。学生にとっては、そもそも芸術作品に対してどの程度の展示スペースが適切なのかという感覚を身につけるのが一番困難であったように思う。それでも優秀作の中には、床・天井・壁の操作にメリハリを付けたり、自然光を取り込む開口部の操作にグラデーションを設けたりするものがあり、絵画と彫刻の展示空間になんらかのつながりを持たせつつ、全体をまとめようとする積極的姿勢が認められた。幾何学操作によって出来上がる空間が人の目にどのように映るのかも想像しながら、さらに創造力を鍛え飛躍していただきたい。

●課題趣旨

100m³の空間を分節し、「絵画と彫刻の展示空間」をデザインする。彫刻と絵画は次よりそれぞれ1点ずつ選ぶ。絵画：モネ「睡蓮の池」、ダリ「記憶の固執」、ポロック「No.5」、彫刻：ロダン「考える人」、モディリアーニ「頭部」、草間彌生「かぼちゃ」。絵画は壁にかけ、彫刻は展示台上に設置することを基本とし、計2点の展示空間とする。全体100m³のなかで、空間を分節し個々の展示のあり方を工夫すること。大小異なる空間の床レベルは、双方のアクセス方法と合わせ各自自由に設定してよい。

●展示絵画

モネ「睡蓮の池」H886 × W919
ダリ「記憶の固執」H241 × W330
ポロック「No.5」H2400 × W120
展示彫刻（適宜、台座もデザイン）
ロダン「考える人」H1890
モディリアーニ「頭部」H720
草間彌生「かぼちゃ」H2000 × W2500

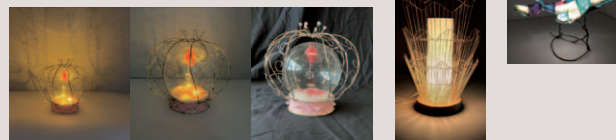
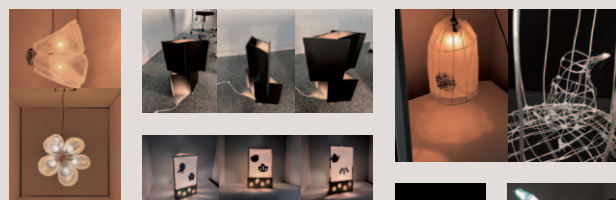
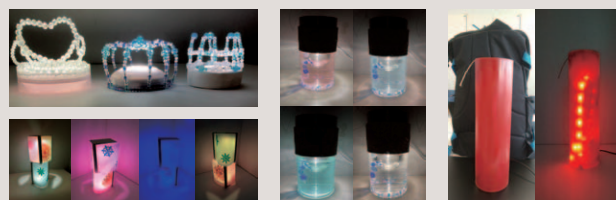
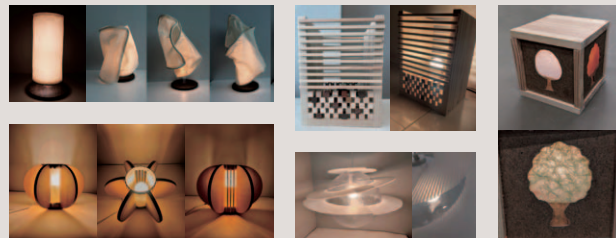
太陽熱を活かす仕組み



■テーマ内容

太陽熱は、夏には遮蔽することで涼を取りやすくなり、冬には室内へ取り入れることで空間が暖くなる。つまり、太陽熱と上手に付き合うことができれば、室内の温熱環境は快適になり、建築物のエネルギー消費も減らすことができる。授業前半では、太陽に関する基礎知識から断熱などの建築的な要素について学ぶ。さらに、後半に向けて太陽熱を活かす仕組みを計画・設計する。授業後半では、太陽熱などの自然エネルギーの要素を考慮した「空間」を実際に製作し、その空間に滞在・観察することで仕組みを理解する。

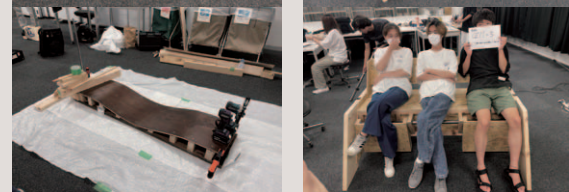
照明デザインと空間の演出



■テーマ内容

建築だけでなく、照明にも様々なデザインがあります。どのような照明を設置するかは、空間の大きさや作り出したい雰囲気によっても大きく異なります。また、照明は、空間を作るためだけでなく、人に対しても大きな影響を与えます。今回、ワークショップの授業では、どのような場所にどのような照明を飾りたいのか空間のイメージを考えながら、LEDのあかりを使って、将来の私たちの地球環境を考えた自分だけの照明器具をデザインしてみましょう。

建築的木質家具の製作～構造編



■テーマ内容

木質家具の製作を通して、建築の安全性を担保する構造分野の感覚を養うことを目的とする。実際の建築物でも、計画・構造検討・施工のプロセスを踏むが、ものを作るという観点では、家具も同様である。使いやすさ、美しさに加え、構造性能の高い木質家具を実際に作り上げるために、模型での構造実験やグループディスカッションを通して具体的な「段取り」を考え、その過程から木質構造物に対する本当の感覚を磨く。

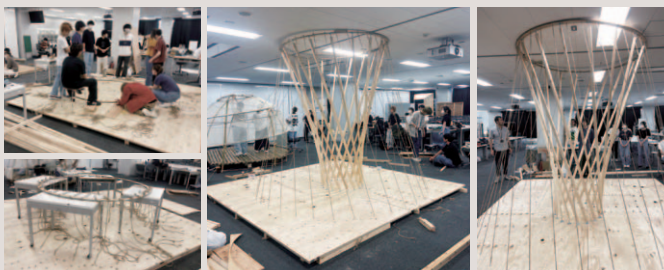
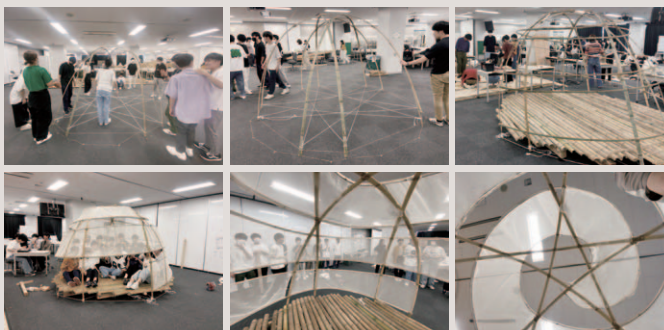
まちのディスプレイを考える



■テーマ内容

これから大学に通うことになり、新しい生活がスタートすると思います。まずは通うことになる北千住のまちがどのようなまちなのかまち歩きをしてみよう。今回、まち歩きの手掛かりとして、まちの中のディスプレイ（展示装置）を調査してもらいます。そして、自分たちでポスターをディスプレイする装置を製作し、実際にまちの中に設置します。ディスプレイによってどのような空間がつけられたのか体感してもらいたいと思います。

“対話”を生み出す建築的仕掛けの創作



■テーマ内容

街の一角、楽しげにふるまう人々を見かけ、彼らに親しみを覚える。皆さんにもそんな経験があるかと思います。ではなぜそのような状況が生じるのでしょうか。そこにある何らかの建築的仕掛けが役買っているのかもしれませんが。本テーマでは、人と人をつなぐ“対話”を生み出すおもしろい建築的仕掛けを共に創作します。構想から設計（前前期）、製作、評価（前後期）を通して、建築を考える・つくる楽しさに触れます。

講評 ● 大崎淳史

ワークショップは、入学直後の1年生が行う最初のものづくりの授業であり、グループワークを通してたくさん仲間を作って欲しいという意図も含んだプログラムである。

授業の前半では、学生の関心に沿って計画・意匠・環境・設備・構造の各分野グループに分かれ、各担当教員の指導のもと学生が主体となってグループによるものづくりのテーマ、構想案を練り上げていく。学生各々がアイデアを出し合い学生同士で議論する場面は授業前半の醍醐味である。アイデアをアウトプットし、スケッチや模型、ことばを駆使して自己表現することの大切さを学んだ。

後半では、各グループで練り上げた構想案に従い、設計図の作成、モックアップの製作、建材調達、工程表の作成等を行う。最後には作品制作である。グループによっては大学ものづくりセンターで工作機械を使って切り出し作業を行う。各分野のエッセンスを体現する作品制作を通して、建築物の計画・設計・施工の本質を実学的に学んだ。どのグループも今後の設計製図や専門科目の修学に資する内容であった。

このような実学的体験を通して、建築はひとりでは出来ないこと、完成の喜びを分かち合える大切さを十分に学べたと思われ、それは作品や学生の表情から感じることができる。

住まいの設計

講評 ● 菅原大輔

建築設計製図 II では、達成目的の異なる3つの課題を設けている。第一課題は、建築図面を理解するための名作住宅「前川國男自邸」の図面トレース／第二課題は、森という抽象的な敷地設定の中で、構造と空間構成と人間の居場所の関係を理解する木造小屋の課題「タイニーハウス」／第三課題は、実際存在する敷地の周辺環境に応答し、「住宅」という具体的な用途を持った住宅課題に取り組んだ。敷地に隣接するポケットパークも設計可能範囲とし、都市的な視野で建築を見る訓練も兼ねている。

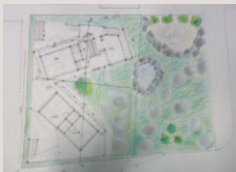
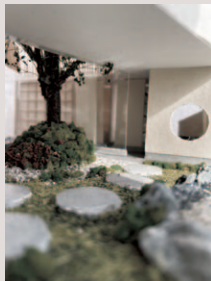
特に住宅課題では、U時平面によって私有地を地域開放する「寄り添う家」、箱の一部を剥がし、これを集合させて中間領域をつくる「向かい、重ね、剥がす」、住まいの一部を地域とタイムシェアリングする「トリオ」、部屋の設えを特定用途に特化して集合させる「趣味と家族と暮らす家」など、多種多様な視点が提示された。

●課題主旨

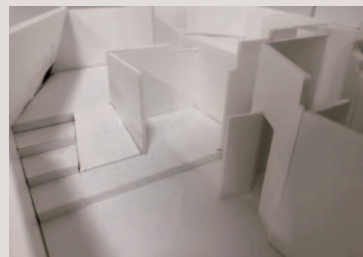
菅原スタジオ [関係性] できた家
日野スタジオ 「働く住宅 / 住む職場」
荻原スタジオ 絵本作家の家
森 スタジオ つくる人の家をつくる
川口スタジオ 庭に住む家
齋藤スタジオ 問題の家
本瀬スタジオ 緩衝帯のある家
佐野スタジオ 都市とつながる〇〇〇の家

●設計条件

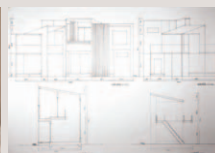
敷地住所：東京都足立区千住東2丁目
家族が暮らすための木造住宅を設計する。周辺環境や方角などを考慮し建築の配置や構成を考える。延床面積は150m²以内。



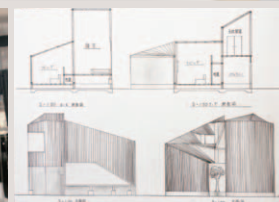
寄り添う家



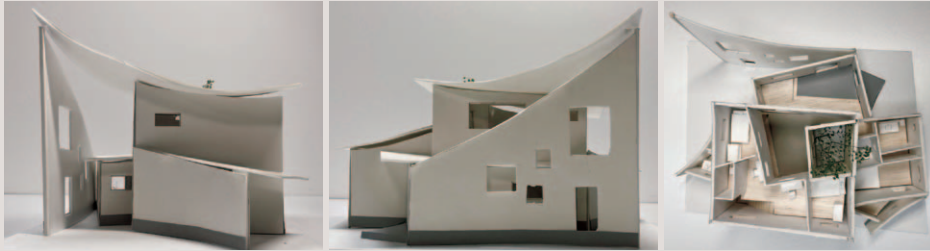
交わる空間、交わる家族



まちの縁側



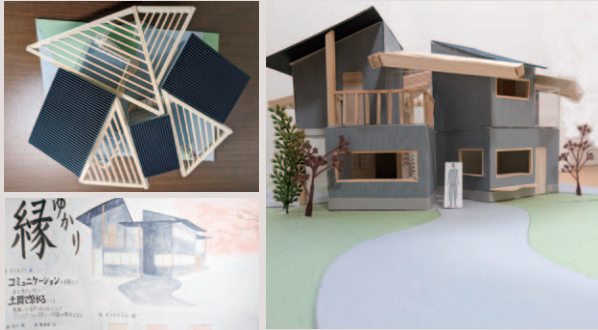
重なる家



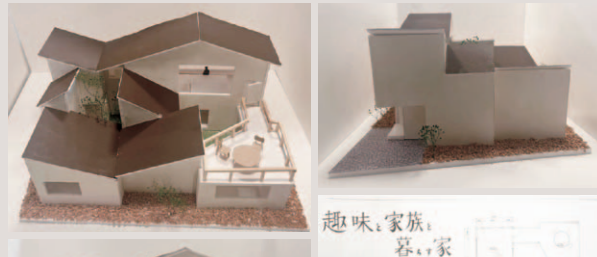
向かい、重ね、剥がす



トリオ



縁



趣味と家族と暮らす家



Passage of Time

公共に開かれた建築の設計 一周辺地域を魅力的に活性化する施設デザインー

講評 ● 小笠原正豊

2年生前期の設計製図 III では、東京電機大学近隣の千住仲町公園を敷地として、小規模の図書館を計画する。手書き中心の取組みを一歩進め CAD や CG など作品を完成することが要求される。設計におけるより実践的なスキルと、ポートフォリオを作成するプレゼンテーション技術を身につけることも目的となっている。

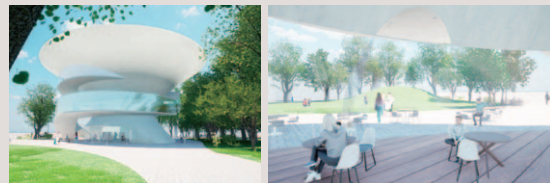
課題は、ランドスケープ・パブリックスペースにも重点が置かれていることから、周囲の特徴を汲み取った多様なアイデアが提案された。「自分と向き合う場」「結んで、ほどく」「ブックプラネット(めぐる図書館)」のように象徴的な形態を提示した案、「起点と動機」「商店街のような図書館」「巡りあい図書館」のように周辺敷地からの通り抜けに着目した案、「窓の中から」や「木々の表情が移り変わる図書館」のように公園の木々を積極的に取り入れた案などが印象的であった。

●課題趣旨

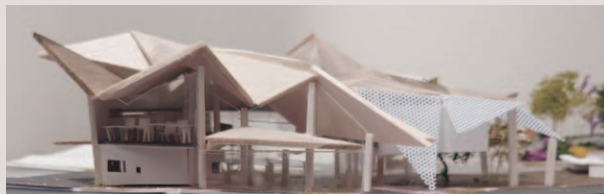
千住仲町公園と併設する図書館を新設する。従来の図書館の機能・使い方に留まらず「ひとが集まり新しいことが生まれる図書館」を計画する。都市の中で周辺環境との関係を捉えながら、人々にとって必要とされる機能を検討しつつ、図書館に併設されたランドスケープ・パブリックスペースも計画する。



商店街のような図書館



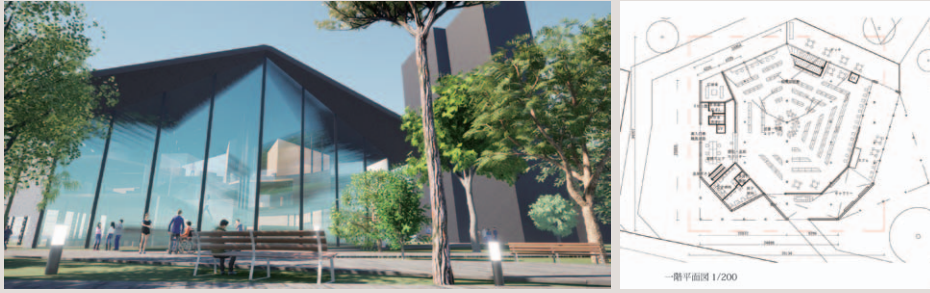
自分と向き合う場



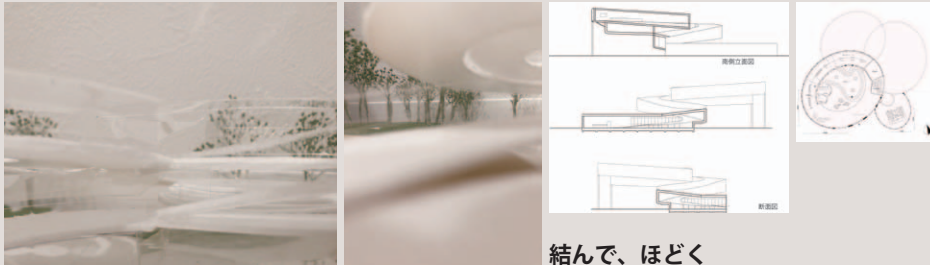
起点と動機



木々の表情が移り変わる図書館



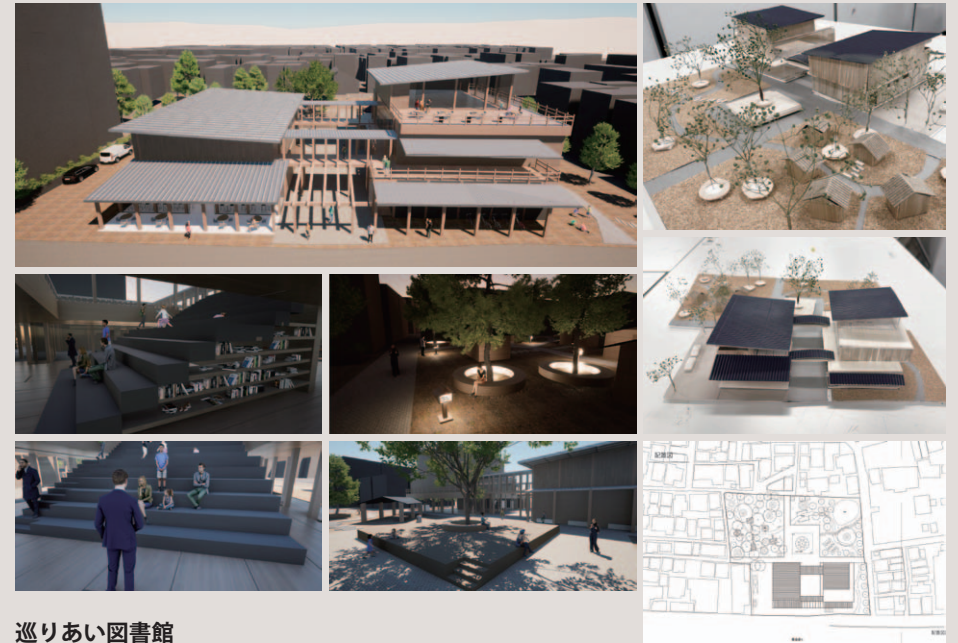
窓の中から



結んで、ほどく

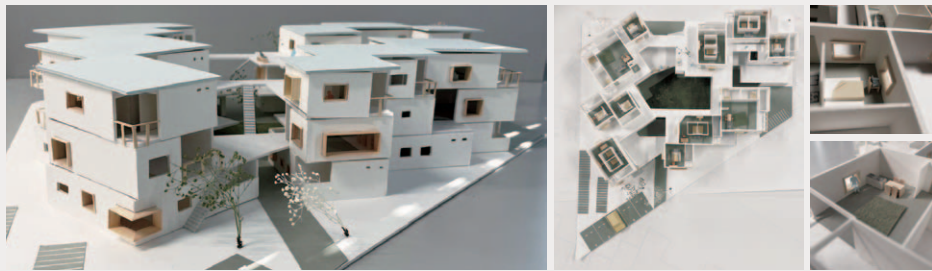


ブックプラネット (めぐる図書館)



巡りあい図書館

集合住宅の設計



出窓と土間でつなぐ



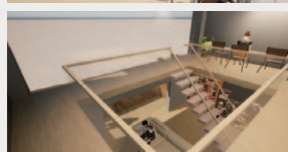
田舎に還る



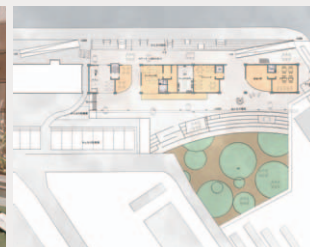
アーケード団地



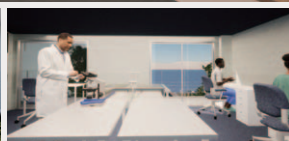
集まって暮らす



Re-Connection



交流の幹



地域の結びつきと
持続可能な農業の未来

集合住宅の設計・改修

講評 ● 山田あすか

この科目では、第一課題では3人組でのグループワークで敷地分割とコモンスペースのランドスケープデザイン、個人敷地にそれぞれが集合住宅を設計する。第二課題では、まちのメインストリートに面した団地内の住棟を、自由な発想で改修提案する。いずれの課題でも、住民同士の交流や地域とのつながり、現代的な働き方、自然環境、住商の混在など多様なテーマでの作品が提案される。平行して展開している座学科目での学びと連動して、意匠面でのオリジナリティやコミュニティ形成、構造的な挑戦、省エネルギー等への興味・関心が盛り込まれるようになる時期でもあり、履修者それぞれの興味や個性が尊重され、またグループワークによる個性の磨き合いや調和が、新たな価値観を創り出すことを期待している。

「出窓と土間でつなぐ」は、“境界の空間”に着目することで、切り分けると同時につなぐものとしての建築、住環境への気づきを得ている。「田舎に還る」はいわば階段型アクセス住棟の階段部分を室内化して縦方向のコミュニティ形成を企図しつつ回廊型アクセス住棟と融合したもので、動線の共有に着目した関係作りがキモとなっている。「アーケード団地」では、敷地内と住棟内での人の行き来が風景になる提案を行っている。「集まって暮らす」は、住戸とされている単位そのものを解体することで、暮らしの場とは何か、人間が集まって場を共有する社会とは何か、安心・安全・快適な暮らしのために必要な要素や建築的配慮とは何かを問いかける。

改修課題では、壁・床の解体、再構築による既存空間の接続が共通して行われていることが特徴的で、近現代の一般的な集合住宅の様式が個別空間への「切り分け」によって成立していることに受講生らは無意識的にせよ気付いているのではないかと疑い、既にあるものを疑い、価値や可能性を見だし、利用し、再編する態度や能力はこれからの建築の職能者にとってより重要性を増していく。

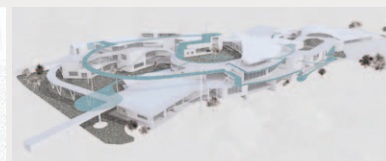
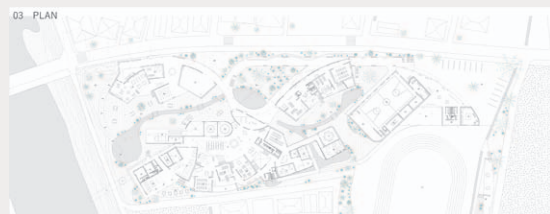
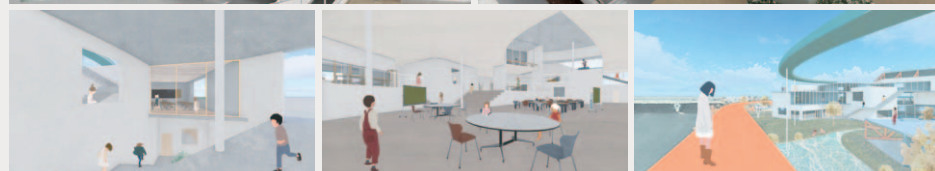
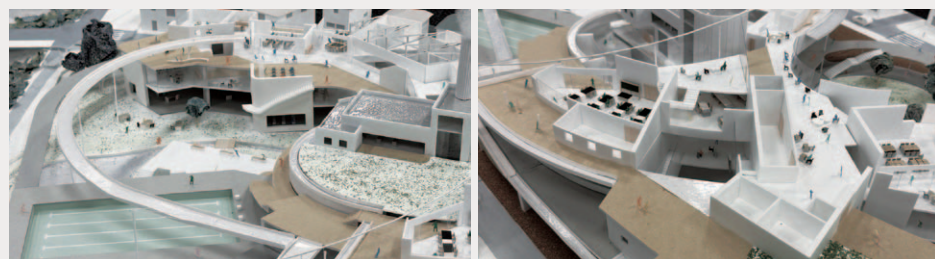
●課題主旨

東京郊外の大規模団地の一角の敷地に30戸程度の集合住宅を設計する。都市環境の中で、人々が【ともに住まう】ためにどのような空間がふさわしいか、また必要とされる機能や性能は何か。周辺環境との関係や今後の社会の変化を捉えながら、「住居」と「住居の集合」をデザインし、快適で魅力ある住空間を提案する。

●設計条件

所在地：埼玉県三郷市・みさと団地の一角 敷地面積：約1,600m²（+10%程度まで）
地域用途等：第1種住居地域高度地区指定なし 建ぺい率：60%とする
容積率：最大200% 日影規制：なし

未来の小学校の設計



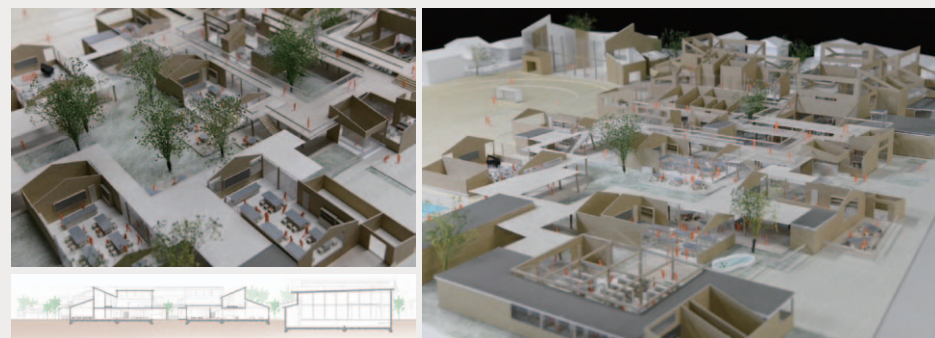
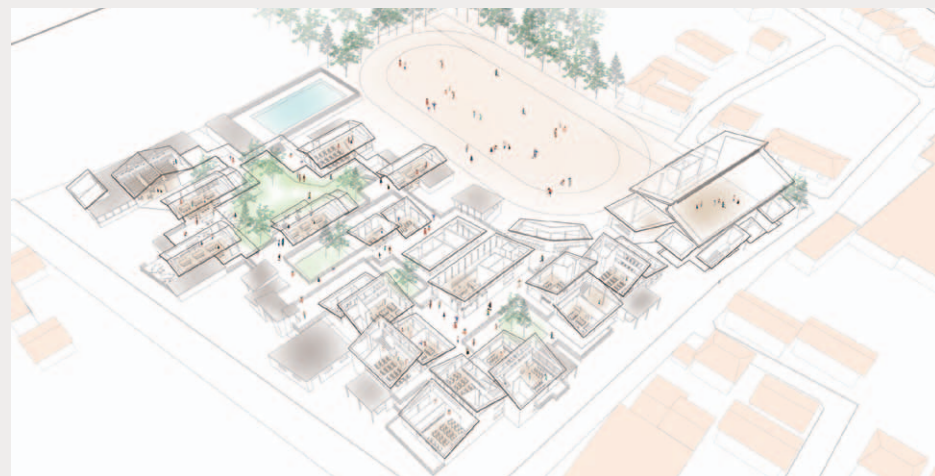
水流の学び舎



流れる雲に乗って



ゆらぐ小学校で
子どもはまちと学ぶ



自然とまちなみ

未来の小学校の設計

講評 ● 日野雅司

3 年生前期前半は各学生が自身の出身小学校を対象敷地として、未来の学校を構想する課題に取り組む。慣れ親しんだ出身小学校を訪れ、敷地や周辺環境をリサーチすることで、これまで生活者として見てきた環境を、設計者の目線で問い直す、というプロセスが重要である。

「流れる雲に乗って」は大規模校の空間計画を、家具スケールまで緻密に完成させている。タイトルの雲のイメージを直喩せずに、抽象化の中で空間を実現させているが、子どもたちの生き生きとした様子も感じられる。「水流の学び舎」は環境装置や水の流れを校舎に取り込んだ、意欲的な提案を行う。極めて多彩な空間の作り込みは、この数年の中でも出色の創造性を感じる。「自然とまちなみ」はボリュームを分散させた集落のような学校を提案している。全体構成も巧みであり、スケール感のよい場のイメージが魅力的である。「ゆらぐ小学校で子どもはまちと学ぶ」は学びの具体的なプログラムに対応しながら、形態から構造に至るまで高い完成度と空間の魅力を実現している。

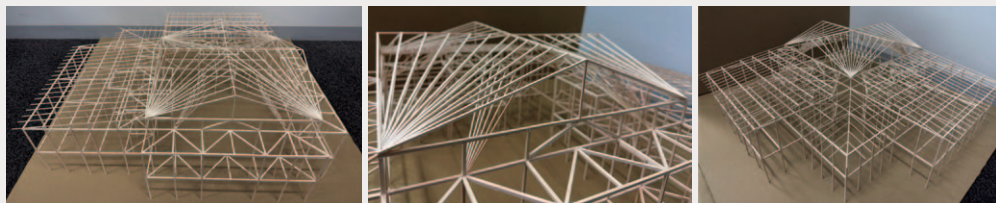
この後、前期後半は各自が設計した建築をもとに、構造と意匠分野が一体となったデザイン演習を行っている。構造デザインと意匠計画の関係について、課題を通して実感することを目的としている。

●課題趣旨

自分が卒業した小学校を調べ、その良い点と問題点を洗い出し、自分が学びたい「未来の学校」を提案する。

●設計条件

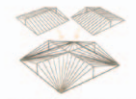
- ・各自、現在の出身又は居住地の小学校児童数に合わせて計画する。
- ・1 クラスの児童数は最高 35 人
- ・生活・総合的な学習、特別活動の授業は各学校で異なるので、出身又は居住地の学校で聞き、必要な教科別特別教室数を求める。必要に応じて学習場所を用意する



ダイアグラム

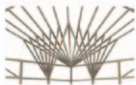
■形状

一つの丸屋根のようにならねられよう。直打する空気の切妻窓を合わせた形になるようにする。そうすることでまじり合いが生まれるだけでなく、高窓の高さ空間にゆとりが生まれる。自然空間が生まれる。



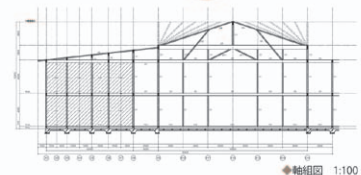
■構造

屋根の構造が木で支えられ、木製の柱を支える高さから、高窓や天井の天井には内方向に広がる方がよい。材料を入れることで機能する。

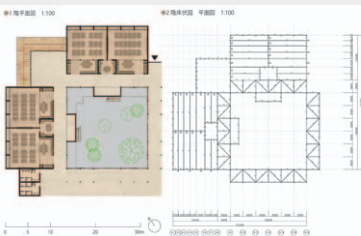
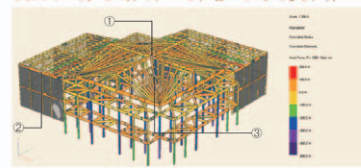


■詳細

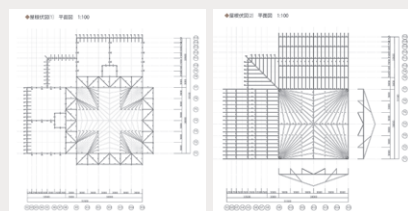
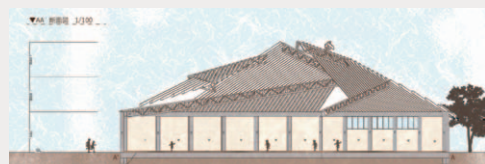
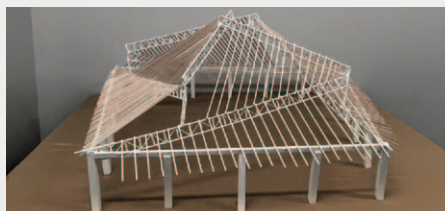
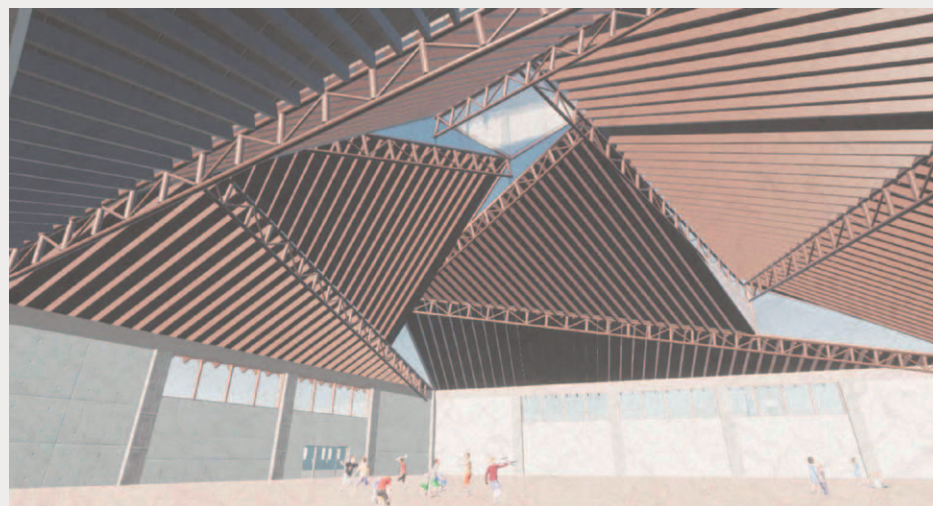
屋根が集中しているところは溝をつくり雨水をはためて、土下をボルトで固定する。



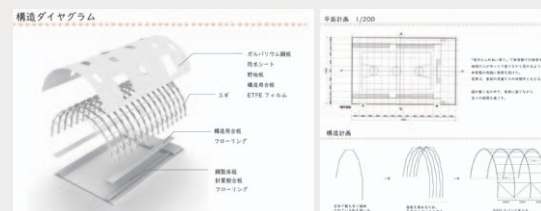
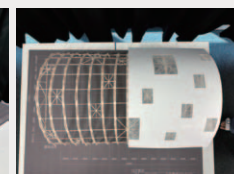
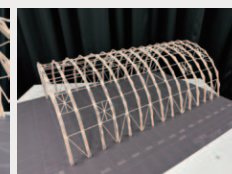
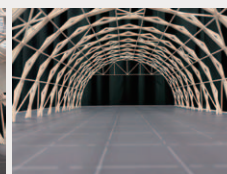
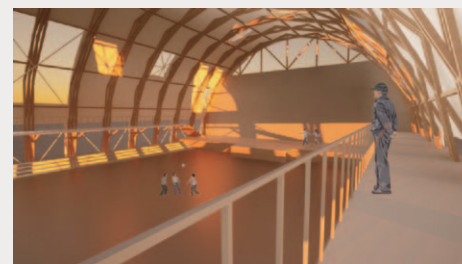
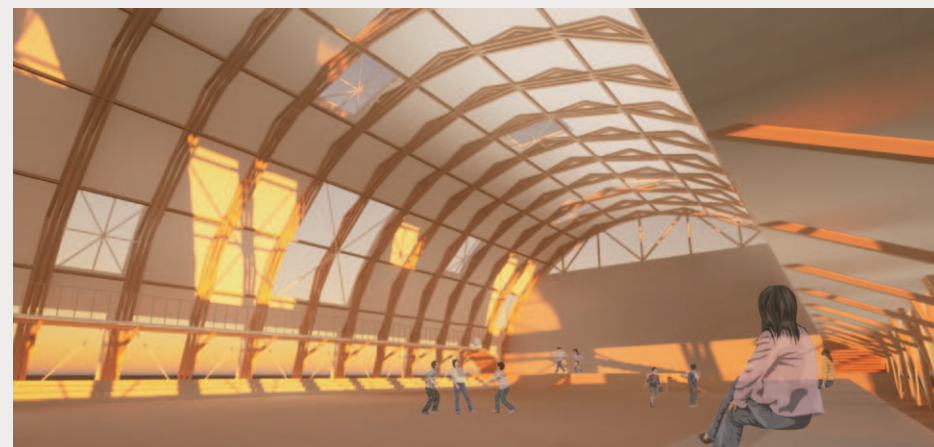
GSA による解析 許容応力度計算



穏やかな光の中で



中心となる体育館
—木造とRC造のハイブリットと相持ちトラス—



祭りのまち

建築からまちづくりへの展開 —企画・計画・設計の関係理解— プロジェクトデザイン

講評 ● 土田寛

北千住駅周辺を対象として実地のフィールドサーベイから地域課題等を抽出し、建築、ランドスケープ、その他デザインなどを駆使し、建築的デザインの解法を念頭においた取り組みを期待した。具体的な敷地（正確にはその周辺を含む）を設定し、エスキスに際しての議論、プロセスはこれまでの演習の成果やノウハウを逆転させる意味で発想の転換など大きな転機と位置付けたい課題である。今年度は、学外からの講評者との交流はできなかったが、人口減少、高齢化社会など建築等に関する実需が見込めない、もしくはこれまでとは違った内容となることが予測される状況下で、創造する、新しい概念にアプローチすることにより考える力を備えるためのひとつのステップであることは間違いないと考える。変革する都市社会における都市そのものや地域を創造的にビルトアップする考え方は4年時に予定する特別設計（卒業設計）に向けても大きな前進になると考えます。

●課題趣旨

建築設計製図Ⅱの小規模な住宅、Ⅲの積層する建築、Ⅳの集合住宅、Ⅴの小学校へと徐々に大規模かつ複雑な建築への流れをもって流れてきました。3年後期の建築・都市設計および住環境・インテリア設計をある意味でアセスメント科目として位置づけました。計画・意匠分野ならびに歴史・都市分野の学生は、この設計を通じて、これまでの建築内部およびその外構が中心であったオブジェクトとしての建築から、都市という社会的な存在を強く意識し、建築を客観視し、特に建築と都市の関係を相対化して建築が地域等に関わる可能性をデザインとして表現することを求めています。

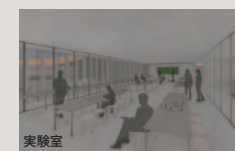
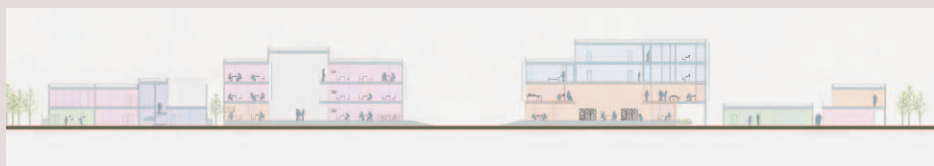
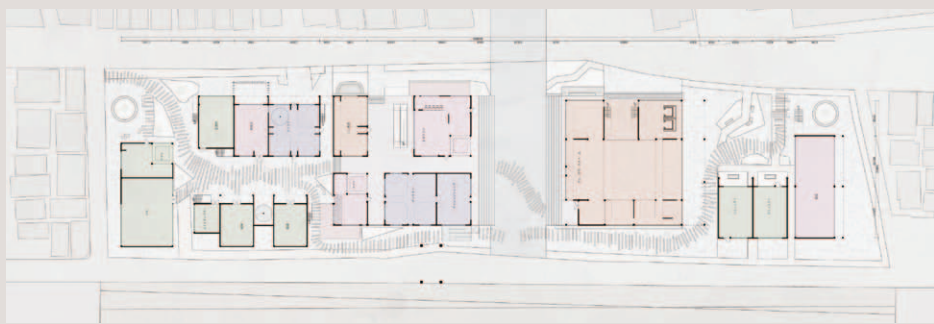
特に一定の広がりのある市街地から空間提案を行う部分を取り出し、クリアランス型から修復型など多様な提案を期待しています。

●設計条件

計画検討範囲は、北千住駅を中心におおむね半径 500m を基本として、その中に設定された約 10,000m² 程度のターゲットサイトを選択し、周辺地区ひいては北千住地区全体に訴求するインパクトを有する企画提案と建築デザインを検討する。



ラーニングcommons外観



実験室



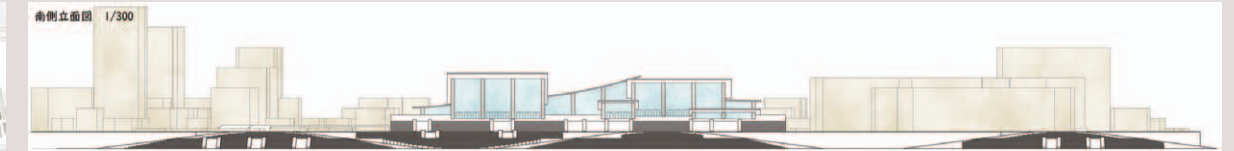
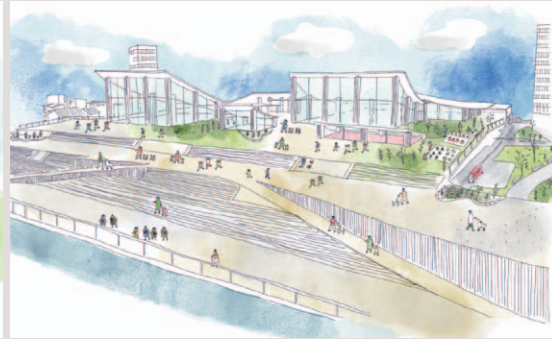
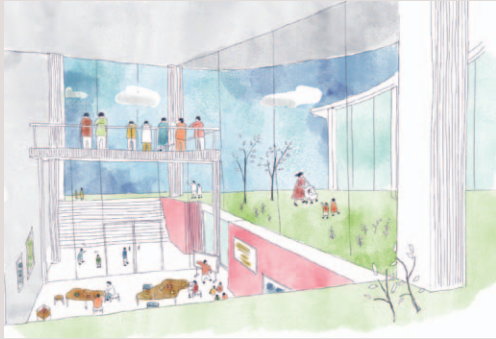
ラボ



ギャラリー

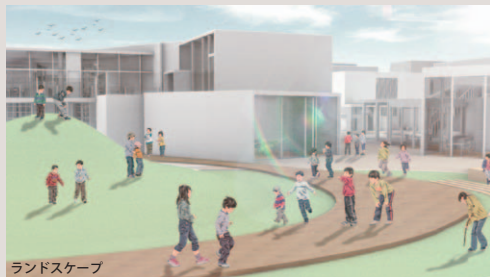


University Town
—研究拠点「千住 Lab」による学園都市のきっかけ—



舩一街をつなぐ、未来を紡ぐー

建築からまちづくりへの展開 —企画・計画・設計の関係理解— プロジェクトデザイン



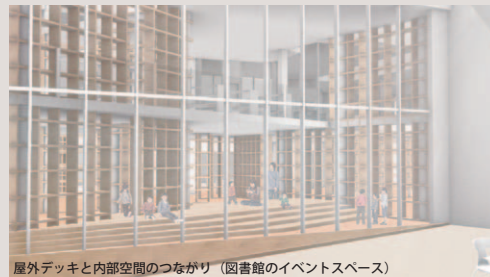
ランドスケープ



図書館正面



図書館 内観 吹抜けて明るい空間



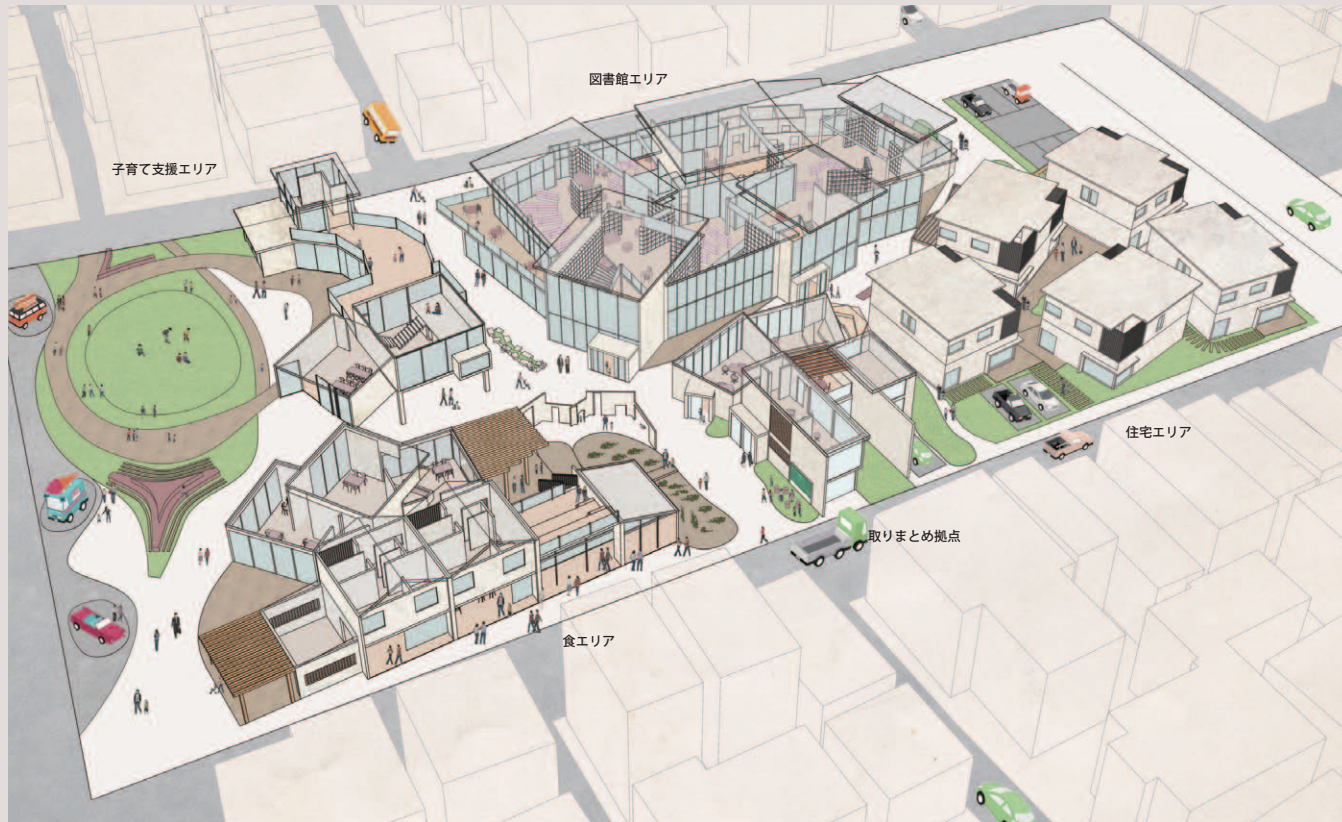
屋外デッキと内部空間のつながり（図書館のイベントスペース）



二階遊び場 トンネルの中で子どもが遊ぶ



商店街バース



図書館エリア

子育て支援エリア

住宅エリア

取りまとめ拠点

食エリア



集合住宅の柵は視線をコントロールするデザイン



住居者の道



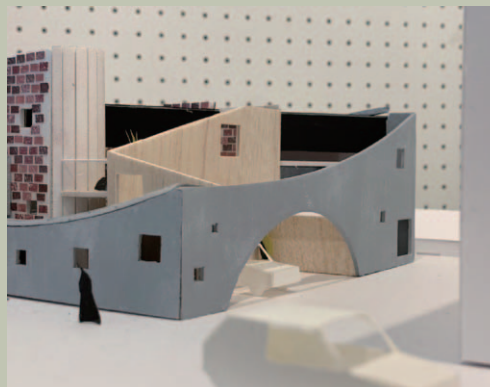
取りまとめ拠点 青空教室



取りまとめ拠点 シアター

育み協創するまち
—境界から広がる町おこし—

■第 50 回 五三会建築設計競技「家」 13 選
「距離に沈む家」



名字が残っています

今年は昨年 の 3 組 の受賞に続き、3 組の学外コンペ受賞があり、多くの学外での評価を得た。

網中 + 鈴木による「伊根に倣う」は 3 つに分節されたボリュームを雁行型に並べたシンプルな形式であるが、そこから生まれる豊かな空間性と、伊根の街に溶け込むようなファサードの操作が見事である。

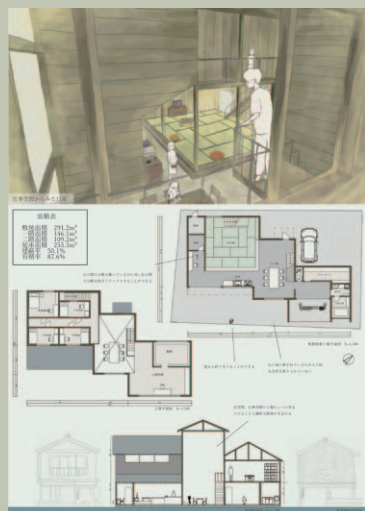
矢部 + 林 + 西脇による「足跡をたどる家」は 3 者の協働によって質の高いプレゼンテーションを実現している。積極的に外部環境を取り込んだ住宅は新しい家、人、自然の関係を創出するだろう。

矢部による「距離に沈む家」は、住宅という小さな気積にあえて積極的に距離を取り込むという意欲作である。誰とでも繋がれる時代において、一人でいることの意味を捉え直した。

今年の受賞は 2 年生、3 年生（当時）のものであり、建築を学び始めて間もない学生達が積極的に学外コンペなどで研鑽を積んでいることをまず評価したい。教員の指導を受けながら進める設計課題と異なり、学外コンペは原則学生のみで行う設計であり、自らの設計能力や思考が試される。もちろん結果も重要ではあるが、同時に大幅な技術向上につながることもあり、学生の皆さんには一喜一憂すること無く、学外コンペにぜひ積極的に取り組んでほしい。

(DA 編集部・森創太)

■木の家設計グランプリ 2023 100 選
「伊根に倣う」

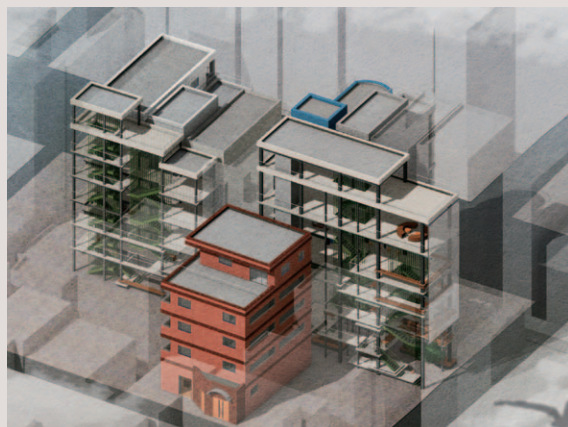


■木の家設計グランプリ 2023 100 選
「足跡をたどる家」





積層されたスラブが居場所として広がる



都市の余白空間の可能性を模索する

本研究では「建築と屋外避難階段の関係」及び「屋外階段空間」について研究を行い、研究結果を設計提案へと繋げることで日常的に利用できる余白空間としての屋外避難階段の実現及び新たな街区の姿を提示するとともに今後の余白空間の活用の可能性を模索することを目的とする。



直交軸でのビル間の繋がりが生まれる



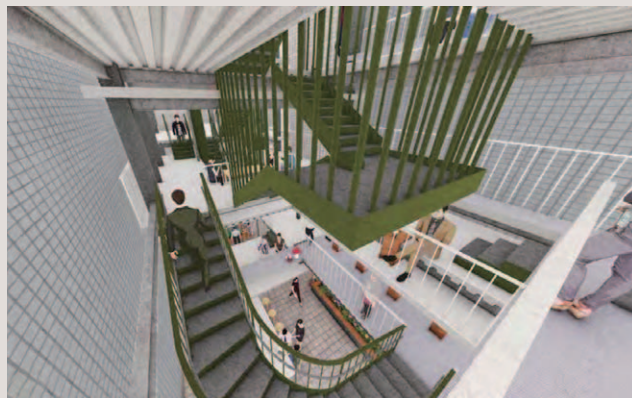
中庭としてビル利用者の居場所となる



余白空間で交流が生まれる



階段のボリュームがアクセントとなる



多様な居場所を見下ろす

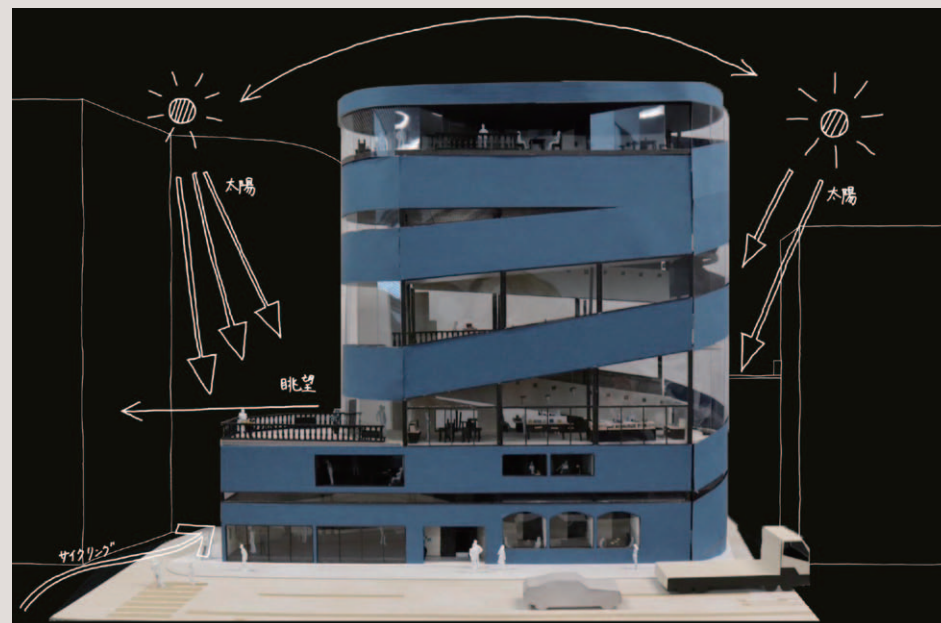
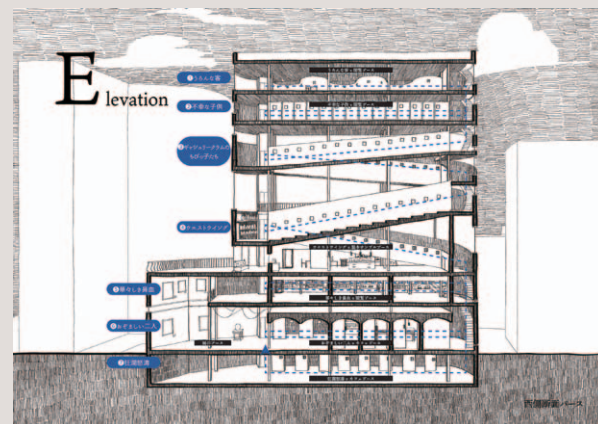
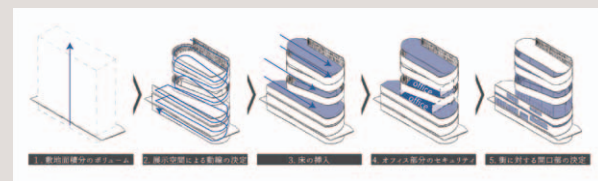
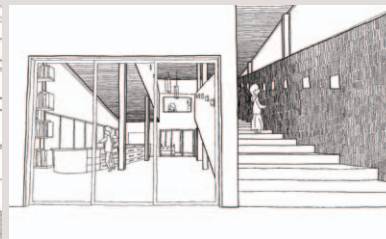


中央では階段が採光のヴォイドとして機能する

彷徨する建築

エドワード・ゴリーの絵本構成を利用した建築の提案

本研究では、エドワード・ゴリーの世界観が描写される【言語表現】と【視覚表現】を始めとしたゴリーの思想を、設計する出版社に取り入れ、出版活動を行う大人を刺激するクリエイティブな空間設計とすることを目的とする。ゴリーは多くの挿絵の中で、緻密なモノクロの線画による扉や壁紙を始めとした空間を描いている。これらはゴリーの描く建築空間として捉えることができ、世界観を実空間に反映させる手がかりとして用いる。



講評 ● 日野雅司

本学の大学院には、意匠と構造の設計者育成のための「スタジオコース」が設けられており、最終学年の1年間を通して修士設計を作成する。まず各自が設定したテーマや敷地に対して徹底した調査・分析を行い、それに基づきデザイン提案を展開する。つまり結果としてのデザインだけでなく、そこに辿り着く知的追求が重要となる。

「都市の余白空間の可能性を模索する」は、神楽坂の雑居ビルの避難階段に着目した、土地利用の効率化提案である。同時に階段をシェアすることで、地域性や商業エリアのコミュニティの存続のための取り組みとなっている。空間の魅力も含め、有意義なプロジェクトとなっている。一方、「エドワード・ゴリーの絵本構成を利用した建築の提案」は、ある絵本作家の創作手法を建築に変換していく試みである。けして前向きな作風ではないゴリーのもつ「理不尽さ」が建築のあり方とオーバーラップした意欲作である。

2023 年度 設計教員

■常勤教員

秋田剛	Akita Takeshi	教授
朝山秀一	Asayama Shuichi	教授
小笠原正豊	Ogasawara Masatoyo	教授
笹谷真通	Sasatani Masamichi	教授
土田寛	Tsuchida Hiroshi	教授
百田真史	Momota Masashi	教授
山田あすか	Yamada Asuka	教授
横手義洋	Yokote Yoshihiro	教授
遠藤薫	Endo Kaoru	客員教授
朝川剛	Asakawa Takesh	准教授
大崎淳史	Osaki Atsushi	准教授
西川雅弥	Nishikawa Masaya	准教授
菅原大輔	Sugawara Daisuke	准教授
日野雅司	Hino Masashi	准教授
荻原雅史	Ogihara Masashi	講師
河原大	Kawahara Hiro	助教
藤井里咲	Fujii Risa	助教
兪ハニ	Yu Ha-Nui	助教
森創太	Mori Souta	助手

■掲載課題担当非常勤教員

会田友朗	Aida Tomoro	濱田慎太	Hamada Shinta
綾井新	Ayai Arata	原浩人	Hara Hiroto
井上康	Inoue Yasushi	村井一	Murai Hitoshi
川口有子	Kawaguchi Yuko	藤田雄介	Fujita Yusuke
川村大樹	Kawamura Daiki	本瀬あゆみ	Motose Ayumi
黒田隆士	Kuroda Takashi	森田祥子	Morita Sachiko
工藤浩平	Kudo Kohei	山雄和真	Yamao Kazuma
河野有悟	Kono Yugo	湯浅友絵	Yuasa Tomoe
斎藤由和	Saitou Yuwa	吉里裕也	Yoshizato Hiroya
佐藤裕	Sato Yutaka	佐々木龍郎	Sasaki Tatsuro
下久保亘	Shimokubo Wataru	川辺直哉	Kawabe Naoya
佐野もも	Sano Momo	仲俊治	Naka Toshiharu
鈴木裕治	Suzuki Yuji	水谷晃啓	Mizutani Akihiro
栃澤麻利	Tochizawa Mari	松田和久	Matsuda Kazuhisa
富永大毅	Tominaga Hiroki	セバスチャン・グロス	Sebastian Gross
虎尾亮太	Torao Ryota		
長尾美菜未	Nagao Minami		
奈良昇	Nara Noboru		
野田垂木子	Noda Akiko		

DA2023-2024 dendai architecture 東京電機大学建築学科作品集 PDF 版

2024 年 7 月 発行

2025 年 1 月 PDF 版発行

■発行者
東京電機大学未来科学部建築学科
〒120-8551 東京都足立区千住旭町 5 番
TEL:03-5284-5520

■編集
設計準備室

■ブックデザイン
井上智陽

■表紙作品
Insel / Housing No.1-5(卒業設計)

DA dendai architecture 東京電機大学建築学科作品集 2023-2024

